

津波から大切な命を守ろう！

文 河田 惠昭

2011（平成23）年に起こった東日本大震災では、なくなった人、ゆくえ不明になった人をあわせておよそ2万人にのぼりました。

なぜ、こんなに多くの方が被害にあったのでしょうか。被害にあった人の半数以上が、おじいちゃんやおばあちゃんでした。年を取ると、足が悪くなって歩くことが困難になったり、ねたきりになったりする人が増えます。だから、自分自身ですぐに避難できる人が少なかったのです。

また、助かった人の中には、一度家に帰った人が3人に1人もいました。実際に津波を見てからにげた人も、10人に1人いました。これらの人も、一歩まちがえれば、津波に巻き込まれていた可能性があります。

津波でたくさんの方がなくなった地域では、立ってられないような強いゆれが1分以上続きました。もちろん大津波警報も出ました。しかし、半数近くの方は、その警報が出たことを知りませんでした。長い時間にわたって地震でゆれたときは、津波が来るかもしれないと思わなければなりません。そう思ったら、にげなければなりません。これは、兵庫県だけでなく日本のどこでも、あるいは世界の海に面した国でも応用できる知識です。

近い将来、四国のおきて、南海地震が起こるのではないかと、とても心配です。兵庫県には、南海地震で起こった津波の第一波が、まず淡路島に約50分で行って来ると予想されています。その後、津波は大阪湾に入り、神戸や東の芦屋、西宮、尼崎を、あるいは西の明石から赤穂を順番におそいます。しかし、これらの地域では津波が来るまでに十分な時間があるはずで、あわてずに避難すれば、命をなくすことはありません。そして、避難したら、少なくとも6時間程度、警報が出ているあいだは家に帰ってはいけません。大きな津波は何度もくり返しやって来るのです。

大切な命を守るためには、どこへ避難するのか、どの道歩いていくのか、家にねたきりのおじいちゃんやおばあちゃんがいたらどうするのか、いろいろなことを地震が起こる前に周りの人と相談して、決めておく必要があります。そして、避難訓練にも参加しなければいけません。地震が起きても、そしてそれが真夜中や、雨が降っているときだとなおのこと、人間というのは、つい、避難しなくてもよいのではないかと考えがちになります。それがとても危険なのです。家族そろって避難訓練に参加して、災害に備えて最善の準備をしておきましょう。

津波はとても手ごわい災害です。津波に対しては、何よりも「にげるが勝ち」なのです。でも、実際には、地震で家がこわれて、道路が通れないかもしれません。ブロックべいも倒れているかもしれません。このような場合でも、地震が起こる前に調べておけば、他の道に行くこともできるでしょう。災害にあって、けがをしたり、命を落としたりしないためには、正確な知識をもち、前もって準備をしておくことが、とても役に立つのです。学校や家でどのような準備ができるのか、先生や友達、家族のみんなと話し合ってみましょう。



河田 惠昭（かわた よしあき）

関西大学社会安全学部長・社会安全研究科長・教授。工学博士。専門は防災・減災。現在、阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長（兼務）のほか、京大防災研究所長を歴任。京都大学名誉教授。2007年国連 SASAKAWA 防災賞、09年防災功労者内閣総理大臣表彰、10年兵庫県社会賞受賞。東日本大震災復興構想会議委員。
現在、日本災害情報学会会長。兵庫県防災教育副読本作成検討委員会委員長。



（共同通信社発行 『絵本 にげましょう』より）